

土壌医で得た『共通言語』で農に関わる人の解像度を上げる

五段農園&小農ラジオ

高谷 裕一郎

1. 土を求めて

秋田県で生まれた私は幼少時より土いじりが好きで、庭に穴を掘っては入ってみたりして土の匂いやしっとりとした感触を楽しむちょっと変わった子供でした。土の近くにいたいという思いから大学は農学部、土壌微生物について卒業論文を書き、望み通り土まみれの学生生活を過ごしました。種苗会社に就職して種の生産管理というまさに土まみれの人生を謳歌・・・の予定が、これが思ったより土に触れる機会が少なく、もっとダイレクトに土に触れたくて、七年前に脱サラし就農という暴挙に出ました。

現在は岐阜県で有機農業をやっており、堆肥作りに力を入れています。詰まるところ、土を育てるには微生物が必要で、良質の堆肥作りが農業には絶対に必要という思いから、これを普及する活動なども色々やって、ようやく「土まみれ」の人生を歩み始めました。

2. 解像度を上げて農業を見る

有機農業を実践するようになって、様々な書物や農業研修を通して有機農業について学ぶにつれて、色々と疑問に思うことが出てきました。目の前で起きている現象について、勘と経験で説明される先人の言葉を、化学や生物学に触れてきた者としては、感覚ではなく体系的に理解できるようになりたいと思うようになったのです。そこで色々調べてみると、化学肥料や農薬を使った慣行農法にも多くのヒントがあることに気づきました。同じ植物を相手として見た時、有機と慣行の区別なく説明ができるはず、と考えたのです。それ以来、有機農業の書物に限定せず、もっと広い視野で情報を取りに行くことで、少しずつ現象についての理解ができるようになったと感じていました。

そんな時に出会ったのが土壌医です。最初は、“OO 医”という名前がカッコいい！というミーハーな動機でしたが、とりあえず二級から受けようとして取り寄せた参考書と問題集のあまりの難しさに驚きました。特に、化学性に関する部分について、pHによる養分の過剰・欠乏、塩基飽和度についての知識などは、これまでちゃんと理解できていなかったことを痛感しました。有機農業＝生物多様性といった言葉に甘えて、現実に土壌の中で起きていることに目を向けていなかったことに気付かされたのです。

有機農業と慣行農業、どちらが優れているか？といった議論は枚挙にいとまがありませんが、これは『共通言語』がないということも理由の一つだと思います。土壌医の勉強をすることで解像度を上げて『共通言語』を持ち、違う立場から農業を見ることができるようになれば、深い議論ができるのではないかと考えます。

3. 土壌医の魅力を発信

土壌医の勉強は本当に面白く、これまでの経験の裏打ちと自信につながりました。それで、自分のポッドキャスト番組※「小農ラジオ」で土壌医について話したところ、リスナーの土壌医の方と繋がり、番組で土に関わる話をしてもらいました。土壌医には、農家に限らず企業や主婦など様々な立場の人がいて、皆それぞれに話が面白く、リスナーにも好評です。

土とは、農家にとって当たり前そこにあるもので、深く知らなくても農業を続けることに不都合はないかもしれません。でも、土壌医の勉強をして『共通言語』を持つことで、地上部だけでなく土の中をイメージしたコミュニケーションができるようになれば、もっとクリエイティブに農業を楽しめるのではないかと考えています。ラジオという媒体で、音声だけで、どこまでこの魅力を伝えられるかわかりませんが、これからも多くの土壌医の方に出演して頂き、土壌医の魅力を発信していきたいと考えています。

※ポッドキャスト番組：スマートフォンなどで聞ける無料のインターネットラジオ。農作業中の耳のお供に、ぜひお聞きください。

